

タマムシをさがしてみよう！

わたなべきょうへい
渡辺恭平（学芸員）

キレイな昆虫の代表、タマムシ

みなさんはキレイな昆虫と聞いて、何を思い浮かべますか？ タマムシ（玉虫）はそのきらびやかな美しさから、キレイな昆虫の筆頭に上がる昆虫です。いわゆるタマムシはヤマトタマムシ（図1）といい、コウチュウ目タマムシ科の1種です。タマムシ科は200種ほどが日本から知られており、ほとんどは1 cm 未満の小さな種です。美しい種はたくさんいますが、ある程度の大きさがある種はヤマトタマムシ、アオタマムシ、アオマダラタマムシ（図2）など、一部に限られます。特に、体長が3 cm 以上もある大型種は神奈川県ではヤマトタマムシと、体が茶色くて地味なウバタマムシの2種しかいません。ここでは、特に身近で良く知られているヤマトタマムシ（以後、タマムシ）についてお話します。タマムシの色は、昔の人も美しいと感じたようで、古くは玉虫の厨子という装飾品に材料として用いられたり、タンスに入れると衣類が増えたりと言われてきました。ちなみに、私もタンスにタマムシを入れてみましたが、まったく衣類は増えませんでした。

タマムシほど昆虫採集をしているか、していないかで見かける頻度が違う昆虫はあまりいません。夏になると、タマムシを拾ったが珍しいのではないかな、という問

い合わせがあります。今の私にとっては、夏になると普通に見かける昆虫ですが、一般の人にとっては珍しい昆虫なのは間違いないでしょう。私も子供の時は、たまに道に死がい（死んだ昆虫）が落ちていて、とても珍しい昆虫であると思っていました。そんなタマムシですが、少し視点を変えただけで、とても身近な昆虫になります。もうすぐ夏がきますが、自由研究や散歩の際に、ぜひチャレンジしてみてください。

タマムシを探すコツ

タマムシがなぜ珍しいと思われるか、それは「人の目の高さに降りてこない」ことが理由です。タマムシの成虫は7月から8月の暑い時期に出現し、エノキ（図3）やケヤキの葉っぱを好んで食べますが、彼らは木の梢（こずえ）を活動圏としています。そのため、これらの木の上を眺めていると、都市部に近い場所でもその姿を見ることができます。その飛び方は独特で、体を斜めに立てて、力強く飛びます。私たち昆虫学者は長竿（ちゆうあみ）という5 m 以上もある捕虫網を持っていますが、これを使えば梢を飛ぶタマムシを簡単に採集することができます。晴れた日に太陽の光が当たる位置によく飛来するため、太陽が傾き、光が当たる箇所が低くなってくると、少し低い位置に降りてきます。これにより、樹

高がとても高いエノキでも、採集できる可能性がでできます。

しかしながら、そんな捕虫網を持っていない人も多いと思います。そこで、より簡単にタマムシに出会う方法を教えます。タマムシのメスは、エノキやケヤキ、サクラ、コナラなどの枯れ木に卵を産み、幼虫はそれを食べて数年かけて成長します。7月下旬から8月にかけて、林の中や周辺の切り株、倒木、部分的に枯れた幹、椎茸のほだ木などを注意深く見てみましょう。しばしば直径1 cm くらいの

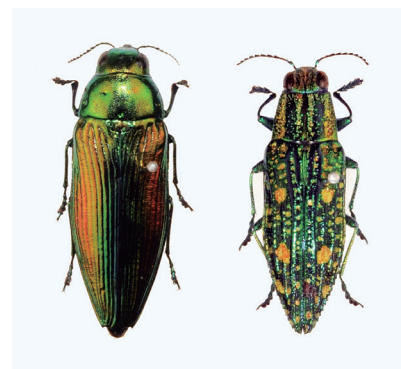


図2 その他の美しいタマムシ2種。アオタマムシ *Eurythya tenuistriata*（左：KPM-NK 36975）とアオマダラタマムシ *Nipponobuprestis amabilis*（右：KPM-NK 36977）。いずれの種も神奈川県では極めて珍しく、出会う機会はほとんどない。

だえん（だえん）あな（あな）
楕円形の孔を見ることがあります。これはタマムシの成虫が出た孔で、条件の良い枯れ木は数年にわたって利用されます。午後になると、メスは産卵のために枯れ木に（こっそり）飛来するので、これらの枯れ木を見て回ると、運がいいと産卵中のタマムシを見ることができます。

枯れ木にとまっているタマムシは、不思議なほど目立ちません。たいていは気づかず足元から飛び立ち、びっくりさせられます。タマムシに限らず、なぜ派手な虫が目立たないのか、自然界の不思議です。ここからは、話をタマムシの色に移してみます。

タマムシの色はなぜ派手なのか？

タマムシのきらびやかな体は、色素によるものではなく、構造色といわれていま

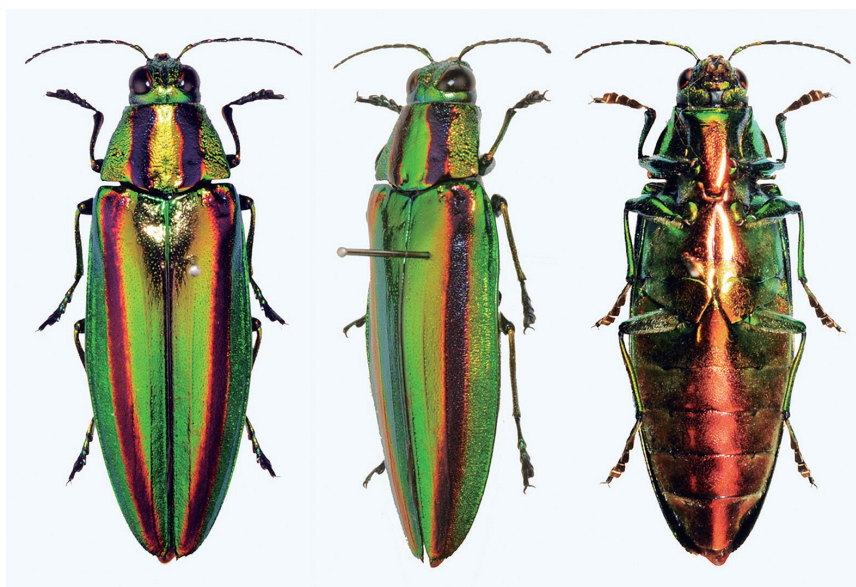


図1 タマムシ（ヤマトタマムシ） *Chrysochroa fulgidissima* (KPM-NK 36974)。



図3 エノキの幹と葉（左下）。幹は白っぽく、ザラザラしている。葉は互生でタマムシの出現する時期には多少とも厚みがある。葉脈は葉の先端の方向に伸びるが、末端部は発達しない、先端方の縁はギザギザしている。葉の写真は学芸員の勝山輝男提供。

す。これは、光の反射を利用したものではなく、翅の内部の微細構造が入射した光を回折・屈折・干渉・散乱することによって、色を作り出すのです（本誌12巻4号p.25参照）。タマムシをはじめ、キラキラした昆虫の多くは構造色による色彩をもっており、見る角度を変えると体の色がわずかに変わります（図1）。塗料を塗らずにすむことから、最近では車をはじめ、様々な分野で利用できないか、盛んに研究がおこなわれています。

タマムシのキラキラ光る派手な色彩は、一見すると鳥をはじめとする捕食者から見つけやすいのではないかと思うことがありますが、実は木の梢を飛ぶ習性に驚くほど適しています。鳥になって空を飛んでいる自分をイメージしてみてください。普段地上にいる我々が空を見上げるとき、背景は空色ですが、空から地上を見た場合、植物の緑色が背景になるのです。そのため、タマムシの緑色は、緑色の葉が作り出す背景にけ込み、上空を飛ぶ鳥からは、見つけにくく、仮に見つけても太陽光の反射が目くらみします。そのため、タマムシはまさに最高の迷彩服を着ているといっても過言ではないでしょう。さらに、彼らの迷彩へのこだわりは本格的なもので、タマムシの仲間では翅を広

げたときに隠されていた腹部にまで金属光沢をもつ種がたくさん知られています。

このように、木の梢を活発に飛ぶ昆虫には緑色の種が多く、タマムシ以外にも、アオカミキリやアオカナブン（図4）、ミドリシジミのような美しい昆虫がたくさんいます。

もっとタマムシを調べたい人のために

タマムシをもっと調べたいという人に吉報です。昨年、日本のタマムシをもうらした「日本産タマムシ大図鑑」が出版されました。これを見れば、タマムシの種名や、どんな植物に来るのかなど、より詳しい情報を知ることができます。ライブラリーにありますので、興味のある方はぜひ読んでみてください。

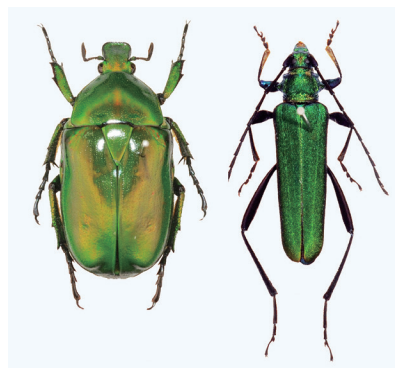


図4 林の梢を飛ぶ昆虫たち。アオカナブン *Rhomborrhina unicolor*（左：KPM-NK 36978）とアオカミキリ *Schwarzerium quadricolle*（右：KPM-NK 36979）。

ちなみに、タマムシを拾ったので飼育の仕方を教えてほしいという質問がありますが、タマムシの飼育はカブトムシやスズムシに比べるとかなり難しいことです。成虫はサクラやケヤキの葉を与えるとしばらく生きますが、秋になる前にはたいてい死んでしまいます。卵は先述のように枯れ木に生みますが、幼虫は数年かけて成長するため、飼育には根気が必要です（私にはできません）。どうしても飼育をしてみたい人や、標本をつくる人以外は、観察した後は元々いた場所に逃がしてあげるのが良いでしょう。

特別展コラム

洗いグマは気が荒い

北米原産のアライグマは、アニメの主人公のかわいらしい姿に人気を集まり、ペットとしてもはやされるようになりました。しかし、気が荒く力も強いので、各地で手に余って野外に放してしまう飼いが増え、今や北海道から沖縄までアライグマのいない都道府県はありません。名前の語源は「水に手をつける」、「こする」などの意味だそうですが、「（気が）荒いクマ」という名前も彼らにはぴったりです。5本



の指を器用に使い、木登りも上手な彼らは、植物も動物も何でも食べて、人家の屋根裏や大木の樹洞などを泊まり場に利用します。夜行性のため日中姿を見かけることはほとんどありませんが、日本の環境に適応して子どもを増やし、平地から低山まであらゆる環境に生息しています。近年は、奈良や京都、鎌倉などの寺院への被害が問題になっています。国宝に指定されている建物の柱やふすまがかじられたり、天井裏がフンで汚されたり、大切な絵に足跡がべったりついても、駆除がなかなか追いつかないのが現状です。かわいらしい姿からは想像がつかませんね。（学芸員 広谷浩子）